

群 教 七	G05 - 07
	平 18.232集

絵に表す題材における 発想・構想の力を育てる指導の工夫

－ 交流活動と試行活動を通して －

長期研修員 中村 順子

（研究の概要）

本研究は、絵に表す題材の製作過程に、交流活動と試行活動を取り入れることで、子どもたちに自分の表したいことを豊かにイメージし、よさや美しさを考え自分らしい表し方を構想する『発想・構想の力』を育て、自分らしい表現ができる喜びを味わわせることを目指し、授業実践を行ったものである。子どもの発達段階に応じた交流活動と試行活動の方法を探るために、小学校の各学年段階における絵に表す題材で授業を行った。

研究の概要

1 基本的な考え方

幼い頃は、絵を描くことが好きな子どもが多いにもかかわらず、思春期になり、ものごとを客観的に見るようになるにつれ、苦手意識をもってしまいう傾向が見られる。これは、写実的な表現ができるかできないかでうまい・へたが意識される傾向が強いためだと考えられる。子どもたちは、写実的に表現できないと「うまく描けるものが見つからない」「思うように描けない」と感じ、絵を描くことの楽しみを味わうことができなくなっていくのではないかと考えられる。

本研究では、写実的に表現できた作品だけが優れているという考え方でなく、自分の思いを表すために創意工夫ができて作品も優れているという考え方を育て、自分らしい表現をすることは楽しいのだと感じられるようにしたいと考えた。

そこで、自分の表したいことを豊かに心の中に描いたり、自分の思いを作品に生かすために何を工夫したらよいかを考えたりすることができる『発想・構想の力』を育てることを中心に取り組むことで、自分らしい表現の喜びを味わわせていきたいと考えた。

『発想・構想の力』を育てるために、具体的には、作品製作の過程に、子どもの発達段階に応じた「交流活動」と「試行活動」を取り入れ、授業改善を図っていくこととした。

(1) 発想・構想の力

自分の表してみたいことを豊かにイメージし、思いを表現していくために、材料・用具や表現方法の使い方をまとめ上げる力。

これは行きつ戻りつしながら進む造形活動の中で養われていくものである。そこで、作品製作の『発想の過程』や『構想の過程』において、自分らしい発想をし、表し方を構想する力を育てるだけでなく、『表現の過程』においても、自分の表現を見直し、造形的なよさや美しさを考えながら、自分の思いを表すために工夫していく発想・構想の力を育てていくこととした。

(2) 『発想の過程』における交流活動

『発想の過程』における交流活動とは、主題についてイメージしたことを交流させることで「自分ならこうしてみたい」と自分の表してみたいことをより豊かに思い描く活動である。

この活動を取り入れることにより、自分の表してみたいことを思い描くことのできない子どもにとっても、友達のイメージしたことがヒントになり、自分の表してみたいことを思い描くことができるようになる。

活動への手だて

学級全体で子どもたちがイメージしたことを交流させていく。

教師は、子どもたちが表してみたいことを思い付くきっかけとして、参考となる作品や資料を提示する。

子どもたちが動作化したり、近くの友達

と相談したりする場を設ける。

交流活動で得られた意見は板書し、視覚化することで参考にできるようにする。

学習カードに記入することで、何を表現したいのかなどの自分の思いを決めることができるようにする。

(3) 『構想の過程』における試行活動

『構想の過程』における試行活動とは、材料・用具や表現方法を試しに扱ってみることで、自分の思いに合う材料・用具や表現方法を見付け、「これでやってみよう」と製作の見通しをもてるようにする活動のことである。

活動への手だて

多様な材料・用具を教師が準備しておく。

試行活動の前に、多様な表現方法のヒントとなるように、参考作品を提示したり、教師が試演を行ったりする。

試行活動の十分な時間を確保し、自分の思いを表現するよい方法を見付けられるようにする。

(4) 『表現の過程』における交流活動

『表現の過程』における交流活動とは、相互の作品のよさを見付け合い、工夫点を教え合うなどすることで、自分の作品が「思い通りに表現できているか」を見直したり、自分の作品の「どこをどのように工夫していこうか」という見通しを立てたりできるようにする活動のことである。

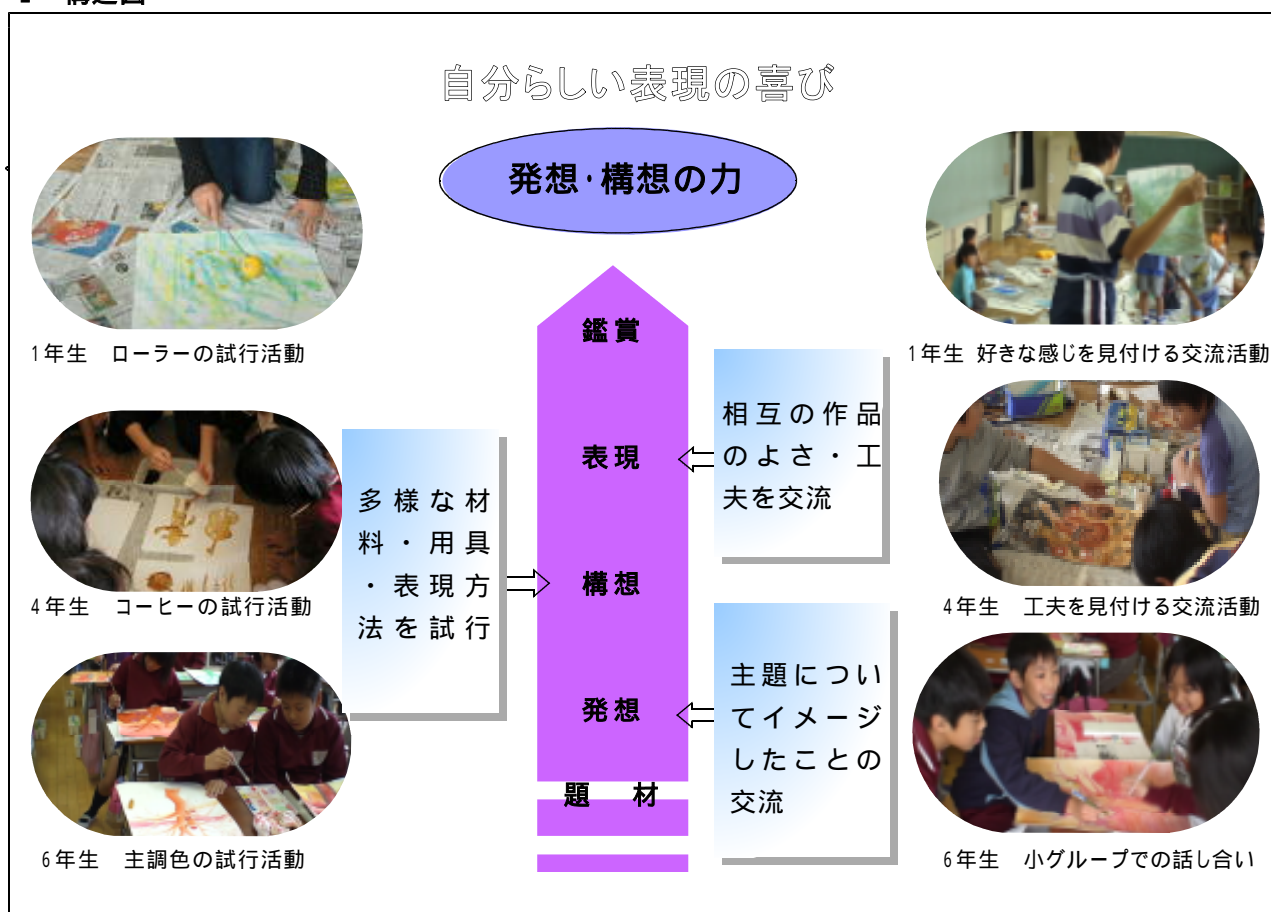
この活動を取り入れることにより、子どもたちは、自分の思いに近付けるために、どんな工夫をしていけばよいのか自ら考え、自分らしい表現を自主的に追求することができる。

活動への手だて

作品を見る視点を示すことで、相互の作品から、よさや表現の工夫を見付けられるようにする。

見付けたよさや工夫、友達や教師からの助言を学習プリントに書くことで、自分の思いに近付けるために、どう工夫していけばよいのか製作の見通しをもてるようにする。

2 構造図



3 内容及び方法

各学年の授業実践における具体的な手だて。

1「発想の過程」 交流活動	2「構想の過程」 試行活動	3「表現の過程」 交流活動
主題についてイメージしたことを交流させることで、自分の表してみたいことをより豊かに思い描く。	材料・用具や表現方法を試しに扱うことで、自分の思いに合う材料・用具や表現方法を見付け、製作の見通しをもつ。	相互の作品のよさや工夫点を見付け合うことで、自分の作品を見直したり、どこを工夫していくか見通しを立てたりする。

育てたい発想・構想の力

自分らしい発想をし、思いを豊かに表現するために構想する。

【低学年授業実践】 1年生[想像の絵] 「このみちとおって」 (全5時間) 一本の道を通って行きたい世界を自由に想像して描く。	イメージしたことを聞き合うことで、思いをふくらませられるようにする。 動作化して考えることで人の動きを豊かにイメージできるようにする。	色や用具を自分の感覚で選び、試すことで、自分のやってみたい色の組み合わせとローラーの扱い方を見付けられるようにする。	自他の作品から、自分の好きな色やローラーの使い方を見付けることで楽しい感じになるような作品の工夫を考えられるようにする。	自分の思いをふくらませ、楽しい感じになるように考えられる。
【中学年授業実践】 4年生[物語の絵] 「村の音楽おじさん」 (全4時間) 物語を聞いて、イメージした様子を描く。	題材にかかわる実物(楽器)にふれることや相互のイメージを聞き合うことで、友達の発想に触発されて自分の思いを深められるようにする。	多様な描画材料を自由に試し描きすることで、材料の特性を知り、どの材料で表現していこうかなどの見通しをもてるようにする。	相互の作品から材料・表現方法の工夫を見付けることで、自分の作品をさらによくしていくための表し方を工夫できるようにする。	自分の思いを深め、よさや美しさなどの感じを考え、思いに合わせて表し方を工夫できる。
【高学年授業実践】 6年生[想像の絵] 「木と友達」 (全9時間) 気に入った木と自分とのかかわりを自由に想像して描く。	見たことや経験したことを思い起こしながら、友達と相談したり、友達のイメージを参考にしたりすることで、自分の思いを深められるようにする。	好きな主調色を選び、木の試し描きをすることで、自分の思いを表す色調を見付け、イメージを表現していく製作の見通しをもてるようにする。	小グループで自他の作品のよさや改善点を見付け、助言し合うことで、自分らしい表現の工夫点を考えられるようにする。	自分の思いを深め、画面の構図・色の調和的な美しさを考えながら、自分らしい表し方をまとめ上げられる。

実践の概要

1 「発想の過程」における交流活動 主題についてイメージしたことの交流

(1) 低学年[想像の絵]での授業実践

手だて

参考作品の提示

教師製作の参考作品を示しながら「この一本の道を通って、行ってみたい世界に行けるんだよ。」と子どもたちに投げ掛けることで、表してみたい

ことを思い付くきっかけをつくる。また、色や表現方法の違いから受ける感じの違いが見取れる参考作品を示すことで、自分の表してみたいことと表現方法を結び付けて考えられるようにする。

動作化

「行ってみたい世界で、何をして遊びたいか」を動きながら考えることで、手や足の動きを具体的に意識し、人物表現を生き生きとしたものにするようにする。

教師の試演

人の動きを表現する方法を知り、自分の表したい動作を絵に表すことができるようにする。

情報の視覚化

子どもからでた意見を板書することで、後で考える時の参考にできるようにする。

子どもの様子

「一本の道を通って行ってみたい世界」をイメージする場面では、教師の提示した参考作品からすぐに思い付き「海に行きたい。」「ジュラ紀に行ってみたい。」などの意見が出始めた。友達が話す世界に「知ってる。」「行ったことある。」との声が聞こえ、友達の考えを基に自分の経験を思い起こす様子が見られた。「夏の世界に行ってみたい。」の意見には、「冬・春・秋」などと連想したことを次々に言う場面も見られた。色や表現方法の違いを感じ取る参考作品を見て、青の色からは水を、赤の色からは太陽の光など生活に基づいたイメージが出された。このように子どもたちは、生き生きとした表情で交流を楽しんでいた(写真1)。



写真1 教師を中心に思いついたことを交流する子どもたち

交流活動の後、子どもたちは、学習プリントに行ってみたい世界を「花畑、黄色、点々」「海、青・白」「恐竜の世界、赤・黄」などと一緒に記入していった。

「行ってみたい世界で何をして遊びたいか」を動作化しながら考える場面では、教室を自由に動いて泳ぐまねなどをしたり、友達の動作を全員でまねてみたりした(写真2)。



写真2 動作化で何をして遊びたいかを考える子どもたち

また、教師が動きを絵に表す様子を見ることで、手足の位置に着目して動きを絵に表す方法を理解していった。子どもたちは「何をして遊びたいか」と決め、自分の考えた動きを手や足の動きに着目して生き生きと絵に表すことができた(作品1)。



作品1 動きを意識

授業後の感想に「つめたいうみができた。」「手を曲げるところをがんばって描いた。」とあり、意欲的な取組が見られた。

(2) 中学年[物語の絵]での授業実践

手だて

実物に触れる

物語に登場するコントラバスに実際に触れたり、楽器を弾く友達の様子を見たりすることで、物語の主人公がどのように楽器を弾くのか具体的にイメージできるようにする(写真3)。



写真3 楽器を弾く子ども

イメージをふくらませる具体的な視点の提示

物語に登場するおじさんはどんな人かイメージをふくらませる場面では、おじさんの体型、帽子、服装、人柄など具体的な視点でイメージを交流させる。友達の発想を参考に自分のイメージを考え直すことで、自分の表したいことを具体的にまとめていくことができるようにする。

子どもの様子

まず、子どもたちはコントラバスの大きさと低い音色に驚き、興味を引きつけられた様子だった。初めは「音楽好き、優しい人柄のおじさん」と漠然としていたイメージが、交流活動の中で、想像をふくらませた意見に変わっていった。交流活動後のイメージは、「身長160cm位、ふつう体型で明るい色の服を着て、ひらひらした四角い形の帽子をかぶり、楽しい話をいっぱい聞いて、みんなを明るい顔にしてくれるおじさん」と具体的に



作品2 アイディアスケッチ

た。また、自分のイメージしたおじさんになったつもりで楽器を弾く友達の姿を見ることで、楽器を弾く姿をイメージに加えることができ、全員が短時間でアイディアスケッチを表すことができた（前ページ作品2）。

授業後の自己評価において、92%の子どもが、音楽おじさんの人柄を表すことができたと感じていた。

(3) 高学年[想像の絵]での授業実践

手だて

全員発表のフリートーク

高学年では発言する子どもが固定化する傾向が見られるので、近くの友達と話す時間を設け、全員のイメージを交流できるようにする。

情報の視覚化

黒板にかいた木に、ネームプレートを貼りでどこで何をしているのかが分かるように視覚化を図り、自分のイメージをふくらませるヒントにできるようにする（写真4）。



写真4 ネームプレート

子どもの様子

「木と友達」をテーマに好きな木と自分とのかわりについて、近くの人と話すことで全員が自分の考えを発表することができた。交流が進むにつれ徐々にイメージが広がり、「枝分かれしたところでで昼寝をする。」「木の枝でカップめんを食べる。」「基地をつくる。」等の意見がでた。このように交流活動を取り入れたことで、自分の思いをもつことができ、アイディアスケッチへの取りかかりが早く、短時間に集中して行うことができた。「木に登る。」と発言したA児のアイディアスケッチには「根本で本を読む、周りで遊ぶ」様子も表現されていたことから、交流活動において友達の発想を参考に自分の思いをふくらませていったことが分かる（作



作品3 A児のスケッチ

品3)。A児は、授業後の感想に「最初は少ししか思いつかなかったけれど、みんなの意見を聞いてイメージがふくらんだ。」と書いていた。自分の思いを十分に表現できたことに対して満足した表情でもあった。他の子どもの感想には「木を描くだけじゃなく人を描き加えることで絵が明るくなった。」「人が入ることで気持ちが表せた。」とあり、より豊かにイメージをふくらませた姿が見られた。

2 「構想の過程」における試行活動

材料・用具・表現方法を試す

(1) 低学年[想像の絵]での授業実践

手だて

多様な色と用具の準備

自分の気に入ったものを選んで試し描きすることで、思いを表す色とやってみたい表現方法を見付けられるようにする。試行時間を確保し、じっくりと取り組めるようにする。

子どもの様子

子どもたちは広い教室の好きな場所を選び、夢中になって製作に取り組み始めた（写真5）。



写真5 並んで試行活動をする子どもたち

前時のローラー遊びの体験や交流活動の中で教師が紹介した表現方法の中から面白いと感じたものを選び試し始めた。特に意欲的な姿を見せたのは、今までの製作では自信のなかった子どもであり、自由にのびのびとローラーを動かしローラーで跡を付けること自体を楽しむ様子が見られた。一人一人の表現には自分なりのこだわりがあり、ローラーの角を生かした跡をひたすら付ける、丸いローラーをとんとんとたたき付ける、長く跡を付けるなどの試行活動をしていた。また、一人が

思い付いて手形を押し付けると近くの子どもが「私も」とまねをして手形を押し出す様子などが見られ、友達のやっていることをまねしてみるなどの試行活動も見られた。この試行活動によって見付けた色や表現方法を使って実際の製作に取り組んでいったことから、試行活動が実際の製作の見通しをもつ役割を果たしたことが分かる。

授業後の感想には「ローラーで描いたのが楽しかった。」「また、やりたい。」とあり、全員の子どもが自分の思いを表現できたと自己評価していた。製作自体を楽しみ、楽しい感じになるように工夫しながら製作を進めたことで、自分の作品に対しての満足度が高いことが分かる。

(2) 中学年[物語の絵]での授業実践

手だて

教師の試演

試行活動に入る前に、描画材料の扱い方と表現方法にどんなものがあるのかを理解できるように、教師が実際にやって見せる。

多様な材料の準備

小さな画用紙を複数枚配ることで、細かいことを気にせず思い付くままに試し描きできるようにする。この試行活動により、材料の特性に気づき、実際の製作においてどこを何の材料で描くか見通しをもつことができるようにする。

子どもの様子

ここでは、今までに使ったことのない描画材料（コーヒーの粉やコンテ）に好奇心をもち、教師の試演を食い入るように見ていた。新鮮な気持ちで材料をどんどん試す子どもの姿と周りの様子をうかがいながらおそろおそろ試す子どもの姿が見られた。子どもたちは、試しに描いていくうちにコーヒーの粉を溶かす水の加減やコンテをぼかした表現の効果をつかんでいった。B児は、試行活動で表したように実際の作品でもコーヒーで輪郭を描くことを選んだ。試行作品では墨を使うことで偶然に生じるにじみが美しかったコントラストの表現は、実物の楽器の色に近付けたいと考えコンテの茶色でぬることに変更した（作品4）。

このように試行活動により、子どもたちは実際の製作においてどの材料を使って何を表現していくのかを考えることができた。自分の思いを表現する見通しをもつことができたため、実際の製作に入ると一人一人が自分の製作に無言で集中する姿が見られた。



作品4 B児 試行作品と実際の作品

授業後の感想の中に「コーヒーで絵が描けるなんて思わなかったけれど、絵の具みたいにすらすら描けてとても楽しかった。」「いろいろな材料があって思いっきり楽しめた。」とあり、自分なりの表現を楽しんだことが分かる。

(3) 高学年[想像の絵]での授業実践

手だて

参考資料の提示

同じ構図で主調色の違う参考作品を示し、色により表せる世界が違うことを感じ取れるようにする（資料1）。



資料1 色調変化の参考作品

教師の試演

試行活動の前に表現の手順が理解できるように、水彩絵の具を使ってやり方を示す。小さい画用紙を複数枚配布し、色調を変えて試し描きができるようにし、多様な色の中から自分の思いを表す配色計画を立てられるようにする。

子どもの様子

水彩絵の具は既習の描画材料であるが、主調色を決め、そこに色を加えながら彩色するという視点が新鮮であったこと、表現の手順が明確であったことのために、楽しんで試し描きする様子が見られた。35分間の試行活動で、2色試すことができた子どもは28人中7人、1色しか試せなかった子どもは21人だった。当初はもっと多くの子どもが多様な試行活動を行うことを予想したが、一つの活動に集中する傾向が見られた。C児は「おだやかな気持ちで寝ているところ」を表現したいと

考えていた。青と黄緑の二通りの主調色を試し、本番では茶系の色を選んだ。「頭の中で、本番のイメージを組み立てていけた。」と感想に書いた（作品5）。



作品5 C児 試行作品と実際の作品

他の子どもの感想には「自分で考えて色をぬるなんて嫌だと思ったけど、やってみたら楽しかった。」「色によってイメージが変わることが分かった。」「いろいろな色を試すことで自分のイメージに合う色を見付けられた。」と言った記述が見られた。自己評価においても全員が役立ったと評価した。このことから、試行活動を行うことで、製作の見通しをもつことができたことが分かる。

加えて、試行活動の間、教師が子どもの表現のよさを見付け誉めることで苦手意識をもつ子どもに自信をもたせることもできた。D児の試行作品

は円を描くような筆の跡が個性的だったので「木の葉を表現する筆の使い方が個性的で、よいね。」と誉めた。その後D児は「こんなふうに描けばいいんだな。」と表現方法の見通しをもち自信をもって表現を進めた（作品6）。



作品6 D児 実際の作品

に「誉められてうれしかった。背景もグラデーションになるようにがんばった。人が少し雑になってしまったけれど自信をもって描いた。今までうまく描けないから嫌いだったけれど、今はとても楽しい。」とあった。失敗してもよいと気楽な気持ちで試行活動をさせる中で、教師が子どものよさに気づき誉めることで、苦手意識の軽減も図ることができた。

3 「表現の過程」における交流活動 相互の作品のよさや工夫から学び合う

(1) 低学年[想像の絵]での授業実践

手だて

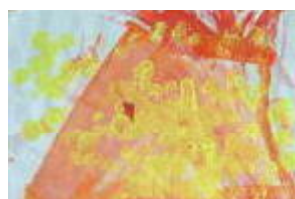
視点の明確化

交流にあたり、ローラーの跡と色の面白い感じを見付ける視点を示す。交流後、教師が見取っておいた工夫のある作品を紹介し、よいと思ったことは自分の作品に取り入れてよいことを確認する。低学年では、試行活動と実際の製作の間に設定した。

子どもの様子

子どもたちは、友達の作品のよさを素直に感じ取り「わぁ、きれい。」と言いながら見ていた。交流後の実際の製作において、ほとんどの子どもは自分の試作品で使った色や表現方法を使い製作を進めている。自分が一度選んだ色や跡の付け方にこだわりをもって製作していることが分かる。

E児は、「恐竜の生きていた世界」を表したいと考え、試行作品では、赤や黄色で火山の噴火の様子を表現した（作品7）。



作品7 E児 試行作品

実際の製作では、火山に加え森の様子を表すために、青や緑を使い縦や横に大きく跡を付け加えた（作品8）。



作品8 E児 実際の作品

このことから、製作を進めながらも思いがふくらみ、足りないと思ったことを付け加えていく様子が分かる。新しい色やローラーの使い方を思い付くきっかけとして、教師が示した「色や跡を工夫していく」ことが意識されているので、交流活動で友達の多様な表現を見ておくことが、表現の工夫を考えるための情報を得ることとして役立ったと考えられる。

(2) 中学年[物語の絵]での授業実践

手だて

視点の明確化

材料の使い方や表現の工夫を見付ける視点を示す。見付けたよさを学習プリントに記入をすることで、自分の作品をさらによいものにしていくためにどんな工夫をしていきたいのかを考えられるようにする。中学年では、自分の製作を振り返り、工夫をすることができると考え、製作の途中に交流の時間を設定した。

子どもの様子

友達の作品を見ながら「ああ、ここいいねえ。」「これ、うさぎ？おもしろいね。」「ちゃんの見て、ひらめいた。」と言いながら見て歩いていた。プリントに記入する段階では、「ううん、何にしようかな。」「周りに木や家を描く」「靴ひもを墨で描く。」「新聞紙を貼って水たまりをつくる。」と自分の考えをまとめる姿が見られた。F児は、自分の作品の左下の空間に何を描こうか迷っていたが、交流



作品7 G児 完成作品

活動でG児の作品を見て「カラスがおもしろい。」と見付け、自分の作品にカラスを描き入れた(作品7・8)。F児は「描きたいように描けてうれしかった。」と感想に書いた。他の子どもの感想には「『洋服の柄に新聞紙を貼り付けたのが工夫されているね。』と言われたのがすごくうれしかったです。できるだけ材料を全部使うように工夫していきたい。」「作品を見る人に、一番見てもらいたいものが伝わるように描きたい。」等とあった。相互の作品から表現の工夫を見付けることは、自分の作品をよりよくしていくためにどうしていくかを考える機会になったと考えられる。



作品8 F児 完成作品

(3) 高学年[想像の絵]での授業実践

手だて

検討視点の明確化

友達との学び合いを通して、自分の作品を見直し、今後の製作の見通しを立てられるようにするために、4人の小グループで作品の検討を行う。検討の際、授業の導入において指導した基礎となる表現技法を実際の作品でどのように使いこなしているかを見付ける視点を示す。話し合い終了後、友達からもらった助言と今後のやってみたいことを学習プリントに記入することで、自分の製作の見通しをもてるようにする。他のグループの発表を聞くことで、多様な考え方があることに気付けるようにする。

子どもの様子

写实的表現にあまり自信がないために、絵を描くことを苦手と感じているH児が交流活動で得た助言を基に自分なりに表現を進めていった様子を述べる。

2時間目の検討の視点 (画面構成)

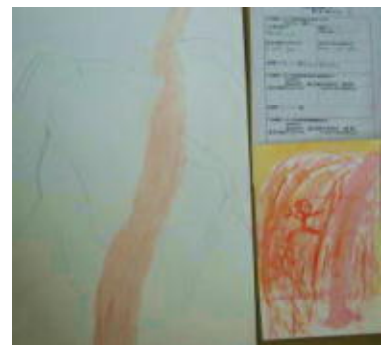
H児は「木で遊んでいるところを描きました。」と発表した。友達から「地平線はどこ？」と聞かれ、描き入れて奥行きを表した(作品9)。



作品9 2時間目の作品

4時間目の検討の視点 (配色計画)

H児は「明るい感じにしたいので、朱色を主調色にしました。」と発表した。友達から「枝がいいね。」「黄色とかも使うといい。」と助言され、見通しを「次は、黄色などの色を使う。」とした(作品10)。



作品10 4時間目の作品

6時間目の検証の視点 (彩色の工夫)

友達から「幹の筆のタッチがいいね。」「山の色



作品11 6時間目の作品

に変化があるといい。」と助言をもらい、「次は、山の色を少しずつ変えていきたい。」と見通しを立てた(作品11)。

8時間目の検証の視点 (作品の完成に向けてどこを描き込むか)

友達から「影を増やすといい。」「山を濃く描くといい。」と助言され「明るいところはよくできたけれど影を描くことができなかつたから、次は影を増やして山を濃くしたい。」と見通しを立てた(作品12)。その後1時間、仕上げを行い作品を完成させた。H児は、授業後の振り返りで、友達に教えてもらったことで自分の絵がよくなったと感じ、自分の思い描いた世界を表現できたと自己評価した。



作品12 8時間目の作品

初めのうち、小グループでうまく話し合いを進めることができなかつたが、回数を重ね、慣れることで、作品改善への助言の内容が、具体的になり量も増えていった。また「こうやるといいよ。」と自分の経験上、うまくできたことを友達に教えたり、友達から言われたことをすぐに直すなど、助言を生かして制作に取り組む姿が見られた。この交流活動により、子どもたちは、何をどう工夫していくか制作の見通しをもつことができ、自ら進んで制作に取り組んでいった。

授業後、82%の子どもが、自分の思いを自分なりに表現できたと自己評価した。感想には「自分のイメージ通りに描けて楽しかった。」「納得のいく仕上がりで満足した。」とあった。

研究のまとめ

1 『発想の過程』における交流活動

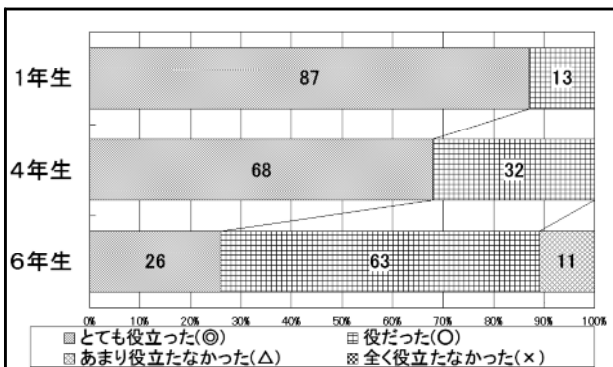


図1 イメージを交流させることが役立ったか自己評価

『発想の過程』における交流活動が役立ったか自己評価した結果は図1に示した通りである。

子どもの感じ方に程度の差があるが、どの学年においてもほとんどの子どもは、主題についてイメージを交流させたことが役立ったと答えている。学年が上がるにつれ、とても役立ったという評価が少なくなってくるのは、成長にともない個性が育ち、自分自身の思いをしっかりとつためだと考えられる。実際の交流活動では、どの学年においても、自分のイメージを発表しながら次のイメージを思い浮かべる子どもの様子や友達の発想に刺激され自分の表したい思いをより豊かにしていく子どもの様子が見られた。どの子どもも、自分の表したいことをつかむことができたため、その後の制作に意欲的に取り組んでいくことができた。以上のことから、『発想の過程』において様々なイメージを交流させることは、自分の表してみたいことをより豊かに思い描くことに有効であると考えられる。

2 『構想の過程』における試行活動

『構想の過程』における試行活動が実際の制作に役立ったかを子どもが自己評価した結果は図2の通りである。

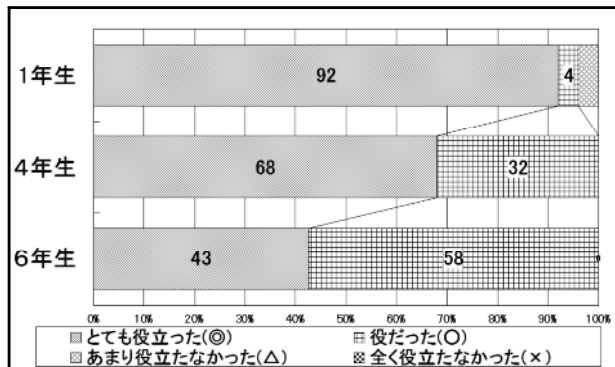


図2 試行活動が実際の制作に役立ったか自己評価

学年が上がるにつれ、とても役立ったという評価は低くなるが、全員が役立ったと評価している。試行活動により、材料・用具・表現方法の利用の仕方を見つけたことで、実際の制作に自信をもって取り組む様子が見られた。特に高学年においては、感想に「実際の制作のイメージをつかむことができた。」とあるように、思いを表すための構想を練ることが意識されたと考える。以上のことから『構想の過程』において試行活動を取り入れることは、材料や表現技法の特性を知り、自分の思いを表すための色や表現方法を見つけていくことに役立つと考えられる。

3 『表現の過程』における交流活動

『表現の過程』における交流活動が表現の工夫に役立ったかを子どもが自己評価した結果は図3の通りである。

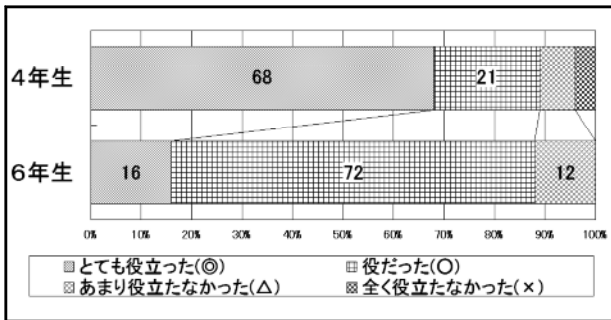


図3 『表現の過程』交流活動が役立ったか自己評価

学年が上がるにつれて、とても役立ったと評価する子どもは減るが、ほとんどの子どもが、製作の工夫に役立ったと評価している。あまり役立たなかったと評価した子どもたちには、自分のイメージを明確にもち、表現力も高く一人で製作を進められる傾向が見られた。中学年の授業では、自分が表現しようと考えていることを友達がどのように表現しているのか見付けることで、自分の思いを表すための工夫を考える様子が見られた。高学年の授業では、小グループでの検討で得た友達のアドバイスに従って表現を工夫していく様子が見られた。感想に「友達のアドバイスで作品がよくなった。」「自分のよいところが見付けられた。」とあるように、学び合うことの価値を感じている。以上のことから『表現の過程』において、相互の作品のよさや工夫点を見付け合う交流活動は、自分の作品を振り返り、自分の思いに近付けるために表現の工夫を考え、製作の見通しをもつことに有効であると考えられる。

4 成果と課題

(1) 成果

授業を終えて、子どもたちは、次のように感想を記していた。「たのしかった。また、やりたい。」(1年)「失敗したら工夫して直せばいいんだと分かった。」「お題(主題)があって、よく考え予想して描けば楽しく描けることを学びました。」「図工は頭を使いながら、つくと楽しいことが分かりました。」(4年)「私は、絵を描いたり、絵の具で色をぬるのがきらいでした。でも、先生の混色や重色の説明や、友達のアドバイスによって、すごく自分で満足した絵が描けました。だから、絵を描いたり、ぬる

のが好きになりました。」(6年)

このことから、子どもたちは、考え、工夫しながら描くことの楽しさを感じとることができたと言える。

製作の過程に子どもの発達段階に応じた交流活動と試行活動を取り入れた授業実践を行うことで、どの子どもも意欲的に製作に取り組み、工夫を楽しむ様子が見られた。特に、絵を描くことを苦手と感じている子どもに、自分なりに表現を工夫する楽しみを感じさせることができ、自信をもって製作に取り組みさせることができた。

このことから、自分の思いを表現するために創意工夫することを大切にしたい授業は、『発想・構想の力』を育て、子どもたちに自分らしい表現をすることの楽しさを味わわせることにつながったと考えられる。

(2) 課題

この授業実践で取り組んだ交流活動と試行活動は発想・構想の力を育てる一例である。今後は、より効率的な交流活動になるように、OHC等を利用し、アイデアや児童作品を投影しながら交流を促進するなど、情報機器の活用を考えていきたい。

自分の思いを表現するには、『発想・構想の力』とともに表現技能も必要になる。本研究で『発想・構想の力』を高めることができたので、次は子どもたちに思いを表現するための基本的な表現技能を身に付けさせていく課題が見えてきた。そのために、限られた時数の中で、基礎的な表現技能を身に付けさせる指導と子どもの思いを生かした指導方法を組み合わせたカリキュラムの作成に取り組んでいきたい。

Web検索キーワード

[図画工作 絵画 発想 構想 交流活動 試行活動]

参考授業実践

鷲尾 礼子教諭 国立市立第四小学校

参考文献

平塚 学教諭 福島大学大学院修士論文

『図画工作科の授業における集団の学び』(2001)
(担当指導主事 田中 賢治)

